

(一) 地域教育の一般目標を取りあげた動機

国の教育の目的や目標は既に教育基本法、学校教育法、或は学習指導要領に明示されており、栃木県もまた教育の一般目標を設定している。従つてこれに加えて足利市の教育目標を作る必要が果してあるだろうか、という反問が吾々の頭の一角をかすめていた。にもかかわらず、あえて市の教育目標の設定を手はじめたのは、国や県の一般目標の抽象性、普遍性を地域の実情に即して現実的に具体化し、目標網の貧困を救い、具体的地域教育の目標の確立を図り、精彩ある教育実践の展開を意図する現場の要請に応じた教育委員会の教育の地方化という、行政施策にもとずくものであったといえよう。

以下項目に従つて、その間の事情をややくわしくのべて見よう。

(1) 現場の要請

吾々が本格的に地域教育の一般目標設定の仕事に取りかかったのは、昭和28年4月教育委員会の要請を受けてからである。しかし、目標設定を意図した基礎的な地域社会の調査研究をはじめたのは、昭和26年4月、教育研究所が設立されて、その中心的な仕事として取りあげられたときからであった。教育研究所は教育の理論と地域の実態に基づいた本市教育の刷新並振興をはかるために必要な研究と調査を行うという目的をもって設立したもので、地域の実態に即した教育の実践的展開は、このような機関における研究成果や科学的資料に裏づけられることによって、より強力なものになるという現場の要請にこたえる施策でもあった。

従つて、教育研究所設立後の本市の教育研究並実践活動のあゆみは、先ず教育目標を設定してこれにもとづいて教育課程を編成し、自主的に力強く教育を推進していこうとする方向をたどったたということができよう。以下少しくこのような風潮を生むに至った当時の現場を考えてみよう。

当時、我々教師並びに教育担当者がみずからの手で地域教育の方針を定め、教育内容を選択し、これを編成するという自由を獲得してから、すでに数年を経過していた。而して、このような自由は一面において、確かに教育の前途を大きく約束してくれるものではあったが、併し又一面このような自由は従来そのような経験の機会をもたず、従つて又、これがための技術を殆んど身につけていない現場の教師達を、惑わせ混乱におとし入れるという結果をも招くことになった。

教育の目標に関しても、昭和22年には国家としての教育の一般目標をやや具体的に試案として提示し、これからの社会を建設していく上に、望ましい人間像をあきらかにした。併しこの試案に示された目標も、戦前のそれにくらべれば多少具体化されたというだけであって、まだ解釈のしようによっては、どうにもとれるような不明確な点をかなり多く残していた。したがつて、文部省としてもこれで充分であるとせずこの教育の一般目標を、それぞれ地域において、その地域の特殊な事情や特殊な必要を充分考慮して具体化するようにと述べていたのであった。

このような状況の下におかれた現場は、一日も早く、より地域の実情に即した具体的な教育の目標と、これにもとづいた教育課程とを編成し現場の教育を推進させることによって、この混乱を何とか切り抜けなければならないという必要を強く感じさせられつつあったのである。

併し、このような地域の実態を調査し、それを分析して、地域にある生々しい生活の課題に結びついた具体的な教育の目標を、早急に設定するというようなことは、それではなくてさえ手一杯な現場の教師にとって無理な話であった。そこで、このような仕事にある程度専念するこ

とのできる機関を早急に設けなければならないのではないかと考えられるに至り、地域における科学的具体的な教育計画の樹立を、中心的な一つの仕事として取りあげるとする前提のもとに、本市教育研究所が設立されたのである。こういう意味から本市教育研究所は目標設定の基礎研究を行うために設立されたと言っても過言ではないとさえいえる程に、研究の主力をここにおいたのであった。こうしたことは、設立後、教育目標設定のための地域社会、並びに児童生徒を含む地域の人々の実態を把握するという仕事のために極めて多くの日時と力を傾けてきたことからもうかがい知ることができると思うのである。

具体的な地域の教育目標を設定して欲しいという現場の声は、このような研究所設立ということにも現れ、更にはその後この教育研究所で取りあげた仕事を強く推進する力ともなっていたのである。

(2) 教育委員会からの要請

教育委員会が発足し、地域の教育計画を樹立するための手ははじめとして、教育の一般目標の設定を意図して、その仕事を我々に要請してきたのは、我々が最初の計画に従って、地域教育の一般目標を設定するための基礎的な調査研究に着手してから二年間を経過したときであった。而して我々は、このような基礎的な調査研究を通じて、現場の要請する具体的な教育の目標は、従来の計画の上に更に実践研究の結果からより一層明らかにされるであろう実践の課題を取り入れることなしには、これを設定することができないのではないかという考えをより深くしつづつあったときであった。そしてできることなら、従来の計画に多少の変更を加えてもこの実践の課題を把握するために、目標設定の仕事をもう少し見送ることも止むを得ないので対はないかと考えていたやさきであった。従って、さきに述べたような委員会からの「地域教育計画の基本となるような具体的な教育の目標を、早急に設定して欲しい」という要請にしても早急に設定することについて多少の異論をもたないわけではなかった。

が併し、我々としても地域における具体的な教育目標を設定し、これを早急に現場に示すということの必要性については充分感じていたわけであり、一日も早く示したいという考えはもっていた。そこでまず暫定的に究極的な地域化・具体化には至らなくても、このような具体化への踏切台ともなり、かつ現場の実践に多少とも役立つと思われるような一般目標を早急に設定し、現場にとどけるための仕事にとりかかっていたわけである。

このような仕事をすることによって、更に我々としては今迄のあゆみに一区切りをつけ、これからの方向をより一層はっきりと把握することができると共に、今に至るまで二年間陰にこの研究に協力して下さった現場研究員の先生達の労苦に多少なりとも御報いすることができることにもなるのではないかと考えた。

(3) その他の動機

而して又付随的なものではあるけれども、この目標設定の仕事を現場の教師並びに地域の人々の参加を得て進めていくことによって、「教師並びに教育関係者の目標意識を明確にする」「地域の人々の教育に対する関心を高める」という二つのねらいを多少なりとも達成することができるのではないかと考えた。即ち、

① 教師並びに教育関係者の目標意識を明確にするという点では

真に具体化された教育目標が設定されて、それが教師並びに教育関係者に示されれば、それだけでこの人達の目標観は深まり目標意識が明確になるということとは容易に考えられる。併し、更にこの人達が自からこの目標設定の仕事に参加するならば、その効果はより一層大きく

なるのではないかと思われた。

②即ち我々は教師並び教育関係者が直接的に地域目標設定の仕事にたずさわり、子供並びに父兄の住むこの地域の生活の課題をあらゆる角度から捉え、これを分析検討して構造づけ、更にこの生活の課題をもとにして教育の課題を明らかにし、この仮設目標とも呼び得る教育の課題から教育目標を設定するという一連の仕事を遂行していくうちに、各教師の目標意識、延いては教育観はより一層明確なものとなってくるであろうと思われた。

③地域の人々の教育に対する関心を高めるという点だけ。

直接教育目標の設定というような教育の営みに地域の人々の参加を仰ぐことによって、教育に対する理解をより一層深め、関心を高めることができると期待した。

(二) 目標設定の基本的な態度

以上のごとき動機にもとずいて昭和28年7月、目標設定委員会を構成し、本格的な仕事に着手したわけであるが、私達はこの仕事に取りかかる前に、これから取りかかる仕事の方向を一層明らかにしておかなければならないと考え、目標設定の基本的な態度を確立するために、まず、所員の外、指導主事、学校教育課長、教育長も参加して、数次にわたりこの基本的な態度について検討し合い、次にあげるような六つの立場を確認して、目標設定の基本的な態度とし、本格的な仕事に取りかかった。次に我々の考えた六つの基本的な立場の概要について述べる。

①地域の経済的・政治的・社会的な生活の課題に根ざした目標。

地域教育の目標を設定するに当り、私達は先ず、子供達を含めた地域の人々の、日々の生活の課題を明らかにし、更にこの課題を分析検討することによって、より生々しい地域教育の課題を捉え、これにもとずいて市の教育目標を設定しようとした。こうすることによって設定されてくる目標は、地域の人々の生活に直結した具体的な教育目標として、教師並びに教育関係者に、いきいきと捉えられるようになるであろうと考えた。

②広く日本の社会の課題、延いては世界史の課題に結びついた目標。

このことは、ちよつと考えるとこの地域の特殊な課題に結びついた目標でありたい、と言うことと矛盾するように思われるかも知れない。併し我々は全く矛盾しないという考えをもっている。何故ならば、地域社会の向上発展のために、我々が地域の人々と共に解決していかなければならない、社会的・政治的・経済的な生活の課題は、数限りなくあるが、しかしこれらの一つ一つの課題は、たとそそれがどんな些細な又特殊なものと思われるような課題であっても、——その奥に流れているものを洗い出してみれば、それらのうち一つとして世界史の課題に連なっていないものはないのであり、更に具体的には、日本の社会の、このきびしい貧困性と、根強い封建性とに連なっていないものはないと思われるのである。地域の課題が、このように、その根底において、日本の課題、延いては世界史の課題と、密接に結びついているものである限り、この地域の特殊な課題と②の日本及び世界史の課題とを共に含むということが決して矛盾していないものであると考えこれを一つの基本的な立場としたのである。

③現場における実践研究の結果を最大限に取り入れた目標。

このことは特に目標設定の方法に深い関係をもっていることであり、我々としては各地でおこなわれている、目標設定の動向を検討すると共に、我々のあゆみを反省し、地域社会の課題（社会課題並びに教育課題）を明らかにするための、従来の手続き方法の限界と、これを打開するための方法とに関する見通しをおぼろげながら、従来とられていた諸種の方法の意義を